◇昭和追憶！偏向思想から子ども達を守れ　　大槻伸次

小学校低学年だったある日の事、近所のおじさんから今夜俺ん家で映画会をやるから皆で遊びに来ないかと強く誘われた。当時は夕食が済んでから寝るまでの間、暗い電灯の下でこれという娯楽があるわけで無く、兄弟喧嘩をするか、ラジオを聴くか、宿題をするぐらいだったのであるから、映画会なるものに誘われれば二つ返事でうん！行くーとなるのは何ら不思議なことでもなかった。

そのおじさんというのは、ソ連のシベリア抑留から帰還して、兄の家に厄介になって居候をしている人だった。おじさんは、とても渋い感じの人であまり出歩いているのをみたことは無く話したことも無かった。ところが、そのおじさんの甥というのが我々と同年代で遊び仲間でもあったから喜んで誘いに乗った。早速、家に飛んで帰って両親に映画会の話をしたら、血相を変え絶対行ってはならないと強く言われた。

私自身として、近所のおじさんがせっかく映画会をやってくれるというのにどうして観に行っては駄目なのかと納得できずさんざ文句を言ったが、親の許可なしに映画を視に行くことは出来なかったので止む無く諦めた。

そこで、何で駄目なのかよくわからなかったが、小学校高学年になって、その理由が段々と解ってきた。というのは日本の敗戦直後、ソビエト連邦と満州国国境にいた残留日本兵約 56 万人はソ連首相であるスターリンの命令で極寒のシベリアへ連行され抑留されたのである。そのシベリア抑留は、極寒の中での強制労働と思想教育が行われたようで、ろくな食料も与えられず飢えと寒さに耐えきれず、多くの抑留者が死亡したと聞いた。死亡者は抑留者の約 1 割に及び、5 万余人の人たちが日本の土を踏むことなく無念の死を遂げたというのである。そのシベリア抑留者の中に友達のおじさんはいたのである。

私自身、後に抑留された人から直接話を聞いたことがあるが、ロクな衣服も身に着けずシベリアの極寒の中、ロシアの女性監督のもと穴掘り作業などの重労働に従事させられたそうだ。ところが、或る時穴の上を見上げると女性監督のスカートの中が丸見えで、石を投げてやったと笑わせたが、よくぞ耐え凌げて帰国できたと云っていた。

父の話によると友達のおじさんはそんな過酷な抑留中の思想教育にすっかり感銘し、筋金入りの共産主義者になっていたようだ（当時、赤に染まったといっていた）。

そして、日本へ帰還してからどこかの組織とつながり、ソ連で受けた思想を日本でも広めようと、映画会などと称し手を変え品を変え純粋無垢な子どもたち等を誘っていたのである（プロパガンダ）。父は、そんな場面から子ども達を守ろうと必死だったようだ。しかし、ソ連抑留中に思想教育が行われたからといって、抑留者全員がその思想に染まったわけではなく、便宜上現地に抑留されているときは、染まったようなフリをしていただけの人たちが大勢だったと聞いたことがある。

（2022/5/22 記）